JRS全日本リコーダー教育研究会

全日本リコ研だより 第７号

令和２年１月２７日発行 JRS編集人 小山内　仁

巻　頭　言

全日本リコーダー教育研究会
会長代行　親泊　明美

明けましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては、幸多き新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は全日本リコーダーコンテスト、全国研究大会「大阪大会」を会員の皆様のご協力により成功裏に終えることができましたこと、心より感謝申しあげます。

今年も全日本リコーダー教育研究会の益々の発展のために、会員一丸となって頑張っていきましょう。

さて、新学習指導要領は今年の4月の小学校完全実施を皮切りに、中学校・高等学校と実施されますが、その中に「社会に開かれた教育課程」の実現のために、教育課程の実施に必要な、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし・・・社会と共有・連係しながら実現させることとうたわれています。研究会としてリコーダーを愛好する児童生徒を増やすために、積極的に児童生徒と関わりをもつよい機会ではないでしょうか。

ある県においては学校支援ボランティアを活用し、導入期のリコーダー指導に関わったり、放課後の活動を支援したりと、リコーダー指導に成果を出しているようです。各都道府県には、リコーダー教育研究会会員としてご活躍なさっている地域の方々がいらっしゃいます。その方々に指導・支援をお願いし、リコーダーのよさを伝えていく環境をつくることも必要だと思います。令和元年の研究大会「大阪大会」において、大阪教育大学附属池田小学校では、休み時間を利用して地域の方々が演奏を披露、子どもたちはリコーダーの楽器の種類や音色に興味関心を示し鑑賞していました。

このように地域人材を活用することで、リコーダー指導が容易になり、美しいものや優れたものに接して感動する心が育てられ、リコーダーに対する興味関心も高まり、リコーダーを愛好する児童生徒が増えることを期待します。

第40回　全日本リコーダーコンテスト　審査員寸評

「全日本リコーダーコンテスト」に寄せて

文部科学省初等中等教育局
教科書調査官　飯田　勉

音色の美しさや音の重なりなどから生まれる響きの豊かさ、そして表現された音楽の表情や雰囲気、味わいなどもきわめて多彩であるということを、リコーダーの演奏を通して大いに味わうことができました。

第40回全日本リコーダーコンテストでは、独奏と重奏（二重奏から四重奏）の審査をさせていただきました。全体を通して、それぞれの編成の特徴やそのよさが生かされた聴きごたえのあるコンテストであり、また演奏会のようでもありました。各地域から参加された皆様、素晴らしい演奏をお聴かせいただきありがとうございました。心より感謝申し上げます。

本コンテストの参加要項を拝見すると、その目的に、「演奏および鑑賞をとおして、参加団体の親睦とリコーダーに関する研究活動を盛んにし……」とあります。コンテストですから演奏自体が審査されるわけですが、学校種や年齢、経験などの枠をこえて、それぞれの演奏を「鑑賞」し合うことにも大きな意味があると思います。小学生や中学生が、高校生や一般の部の演奏を聴いてその優れた技能や表現に感銘を受けることもあるでしょうし、逆に一般の部の演奏者が、小学

生の奏でる純粋で美しい音にリコーダーのよさを再認識することもあるかもしれません。もちろんリコーダーに限ったことではありませんが、音楽を学んでいく上で、音楽のよさや美しさを味わって聴くことは大切なことです。単に「上手な演奏だな」とか「私たちの方がうまいな」とかで終わることなく、技術的な面、曲をどう解釈しているか、さらに表現上のよさや音楽が醸し出す雰囲気などを自分の耳でしっかりと聴き取ったり、感じ取ったりすることが重要だと思います。このことは、例えば、楽譜を読み解きどのように表現しようなどと試行錯誤する際に役に立つかもしれません。また耳を鍛えるという意味では、自分自身の出す音を吟味したり、重奏などの際に互いの音や旋律をよく聴き合ったりすることにもつながっていくことでしょう。コンテストを拝聴し終わった後、こんな思いを巡らせました。

終わりに、各地域の大会を含め参加された演奏者の皆さん、全日本リコーダー教育研究会をはじめ、関係する皆様に敬意を表するとともに、本コンテストのますますの発展を御祈念申し上げます。

「リコーダー音楽の宝庫、ルネッサンス」

文部科学省教科調査官
志民 一成

平成31年3月30日に開催された第40回全日本リコーダーコンテストでは、「合奏部門」の審査をさせていただきました。小学校、中学校、高等学校、大学、一般の全てにおいて、各団体それぞれのよさが発揮されていたと感じました。また、いずれの団体もリコーダーの音色や響きのよさをしっかりと生かして表現できていたと思います。

その中でも、とくによい演奏だと感じた団体は、まず、一人一人の楽器がよく鳴っていた、ということが言えるかと思いました。その楽器をしっかりと鳴らし、十分に響かせるためには、息をどう入れるか、タンギングをどうするかなど、様々な要素が関わってきます。それらの様々な要素をコントロールするためには、まず自分の音をしっかり聴くとともに、自分の身体がどのような状態になっているかをモニターすることが不可欠です。これらのことは、リコーダー演奏に限らず、様々な音楽表現において大切なことですが、それが音として実現できていたことは大変素晴らしいことだと感心いたしました。

もう一つ感心したことは、ホールの響きを意識して演奏できていた団体が、いくつか見受けられたことです。これは自分の音をしっかり聴くこととも重なる部分がありますが、ホールに響いている自分たちの音をよく聴いて、その響きに合った吹き方を調整することができると、演奏のよさがさらに引き立てられるように思います。普段、あまり残響の少ない場所で練習していたりすると、ホールのような響きのよい空間で演奏した時に、音楽の細かなニュアンスがうまく伝えられないことがあります。ホールでの演奏を想定して、よく響く場所で練習する機会をつくり、いろいろな息の使い方やアーティキュレーションを試してみることも、効果があるのではないでしょうか。そういった、様々な工夫をすることができるのも、リコーダーの大きな魅力の一つだと思います。その魅力をこれからも存分に味わって、演奏を楽しんでいただければと願っています。

最後になりましたが、全日本リコーダー教育研究会をはじめ、関係の皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、本コンテストのますますのご発展をご祈念申し上げます。

「息使いと指」

リコーダー奏者
田中 せい子

皆様、今年も素晴らしい熱演の数々をありがとうございました。1組1組の演奏に対する真摯さがひしひしと私にも伝わってきて、こんなにたくさんの方達が、こんなに一生懸命にリコーダーを演奏されていることに、例年に劣らぬ大きな喜びと感動を味わいながら聴かせていただきました。今回、台湾・新竹縣興隆國小学校の蕭韵蓉さんの演奏はテクニックもさることながら「音色」という点で際立っていました。ソプラノリコーダーであるのにアルトのような深い響きを出せていたことがとても印象的でした。

ところで、ちょっと考えてみていただきたいのですが、あなたはたくさんあるリコーダー指使いの中で、どれが一番好きですか？どの指使いで一番きれいな音を出せると思いますか？

こんな質問が可能なのは古楽器リコーダーならではのことだと思います。なぜなら多くの管楽器はリ

コーダーが途絶えてしまったバロック時代以降も発展を続け、近現代に完成したモデルでは、指使いに関係なく、どの音も均等に出るように作られているからです。ところがバロック時代で発展がストップしたリコーダーは、指使いによって大きい音、小さい音、繊細な音、出しにくい音など、一つ一つにそれぞれ特徴があり、音域や指使いで息の流し方を巧みに変えないと、きれいに響いてくれないのです。

自分の好きな音色を見つけるために、練習の中で息と音の響きに向き合う時間を作ってみることを提案します。楽器を持って、ある音の指使いを作った時、その指の時はどんな息を入れるか、吹く前にイメージしてみることはとてもいい練習です。そして音を出した時、イメージ通りの音をきれいに出すことができるか、高、中、低音域、クロスフィンガリングでそれぞれ試してみると良いと思います。きっと、よく響く音を出すには、息の量、速さが、音域や指使いによって全く異なることに気づくでしょう。リコーダーはただ息を入れればいい、という一般的なイメージとは大分違っていることを実感するはずです。どんな息の時に自分がいいな、と思う響きになるか、どんな息だとあまりきれいでない音になるか、指の押さえ方が強いとどうか、柔らかいとどうか、ロングトーンやゆっくりな音階などを吹きながら一つ一つの音と息と向き合うことで、リコーダー演奏になくてはならない繊細な感覚を養うことができます。そして、指使いと息使いをセットでイメージできるようになった時、きっと楽器は今までよりも一段と美しく響くようになっているはずです。

きっと出来る事を！

リコーダー奏者
吉澤　徹

精進し、心を込めた皆さんの演奏から日数を経て、今回録音の形でコンテストを振り返る機会をいただきました。

私の担当した小ホールは、アンサンブル、つまり自身のパートに責任を負い、他声部と会話をし、互いに表情を高めていく演奏が本分となります。

生演奏でなく録音のみで、その点がどう感じるかを聴いたのですが、音色、フレーズ感、曲全体の構成など、驚くほど多くのグループが一様に聴こえる印象を持ちました。

演奏で他パートとの会話をするより、とにかく自分が確り吹くことを優先しています。発想を変え、例えば或るパートに代わり自分が前に出て、その後誰にメインを譲る、等の曲想を理解し表現をする意欲が欲しいです。

全てのグループが楽器を良く鳴らす能力に秀でていますが、本来リコーダーはピアノ(弱音)方向へ幅広い性能を有するのに、ディミヌエンド時の副作用(音程が下がる、音色のヴィヴィッド感が不足する)から、ダイナミクスを拡げる勇気が見られず、結果的にクレシェンドを表現し切れない処がありました。

音程に関しては大変改善されていますが、自らのハーモニーをまずは自分達で楽しみ、その喜びを聴衆に伝えようという意思に欠けています。特に難しいのは長調の気分の表現で、いたずらにエネルギッシュに追い込むだけでなく、息のスピード変化を工夫し、ウキウキと心が高揚する感覚を持ちましょう。

具体的には、

1. 強弱拍、表/裏を、単一連続のタンギング連呼ではなく、2,3,4種類のシラブル組み合わせに挑戦しているか。
2. 基音である第1オクターブの音に対し、何気に強調している高音域や難易度の高いフレーズが、曲想に合っているか。
3. 細かい音型後、セクエンツ、シンコペーション中にある持続音など無自覚で拍尾へ押し込みクレッシェンドしていないか。
4. 自らの演奏音だけを聴き、イントロが拍頭からか、弱起(表/裏も)であるか、抑揚が付いているか。
5. 舞曲の様な、リズムを尊重しある種のリフレイン感を伴う曲か、フーガのように他声部と絡み合い、時には小節を跨ぎ拍頭のアクセントを消すなど、様々な表現を工夫しているか。

等、皆さんならば必ず確認、実践出来る事をやってみましょう！

練習時、吹く前にまず歌い、考える。この習慣を日々心がける。すると、驚く程他声部が聴こえ、曲の景色が浮かび上がってくると思います。

自分達だけの、そして必ず出来るはずの演奏を今後期待しています!!

第40回全日本リコーダーコンテスト審査を終えて

上野学園大学講師
リコーダー奏者
太田 光子

私は第33回全日本リコーダーコンテストから審査に参加させていただいております。全国各地から集まってきた、リコーダーに一生懸命取り組んでいる皆さまの演奏をお聴きできることに、毎回本当に幸せを感じております。今回もリコーダーの魅力をしっかりと伝える、大変素晴らしい演奏に出会うことができました。特に印象深かった団体を感想とともに挙げてまいります。

小学校の部では、「北米イエローストーン～躍動する大地と命～」を熱演した三重県鈴鹿市立旭が丘小学校。「躍動する大地と命」のタイトルにふさわしく、それぞれのシーンを感じさせる、臨場感あふれる音楽を繰り広げていました。台湾・新北市光華國小学校による、S.マーシャル作曲「交響曲第1番」の演奏は、コントラストのはっきりした音楽づくり、リズムに乗って生き生きとしたパフォーマンスが大変印象的でした。

中学生の部ではホルボーンの組曲を演奏した北海道寿都町立寿都中学校、素直かつ洗練された演奏に好感がもてました。時折つけていた装飾音も趣味の良いものでした。また、新潟県佐渡市立南佐渡中学校によるA.レヴィン作曲「セヴァーン川の西」は、全パートがたっぷりと歌い、堂々と音楽の流れを生み出している様子がすばらしかったです。

一般の部では、A.チャリンジャー作曲「バラード、ブルース、リフス」を暗譜で演奏した三重県enfys、何よりもリコーダーの鳴らし方そのものが良く、音色の美しさは抜きんでていました。曲の特徴を捉えた表現も見事！そして、「明日香の里へ」を演奏した北海道RECつべつ。重厚なハーモニーをつくり出す豊かな音がまず印象に残り、内声が埋もれることなく各パートの役割がはっきり聴こえてきて、立体感のある音楽づくりが秀逸でした。

この場には書ききれませんが、他にもすばらしい演奏に多く出会えたことを、申し添えておきます。出場者の皆さま、素晴らしい演奏をありがとうございました！コンテストに関わる先生方のご尽力、そして指導されている先生方の熱意に、感服しております。子供たちがこのような貴重な経験を機に、これからもリコーダーを吹き続けて、ステキな音楽といつも一緒にいる大人に育っていってほしい、と心から思います。

さて、また来年はどんなすばらしい演奏に出会えるでしょうか？今からとても楽しみにしております。

「美しい音色を目指して」

上野学園大学講師
リコーダー奏者
浅井 愛

私は小学校5年生の時、リコーダーを熱心に指導してくださる先生と出会い、全日本リコーダーコンテストに出場しました。リコーダーの演奏家、指導者になりたいと強く思ったのはだいぶ先の話になりますが、このコンテストがきっかけでリコーダーに興味をもちました。きっかけというのはどこにあるかわかりせん。その思い出深いコンテストに審査員として呼んでいただいたことは大変光栄です。

第40回コンテストでは大ホールにて皆様の演奏を聴かせていただきました。全団体が堂々とそして真摯に演奏している姿に感動しました。これほどまでに難しい作品をまとめるにはそうとうな努力が必要だと思います。皆様の演奏それぞれに拍手を送りたいです。

特に、一般の部の沖縄県・Ensemble Beney(アンサンブル・ベニー)、G.ビゼー作曲『ビゼー幻想』の演奏に魅了されました。ダイナミクスの付け方や音楽作りに工夫が見られ、タンギングが明確でフレーズが際立っており、中でも音色の美しさに驚きました。

ところでみなさん、音色を美しく吹く場合、どのような事に注意して演奏していますか。音色は息のコントロールが出来ていると同時に体の使い方で善し悪しが決まります。次の3つのポイントに気をつけてください。①かまえ方に無理がないか（親指、人差し指の支えは的確な所にあるか）②首や手首をブロックして吹いていないか、③喉に力を入れて吹いていないか・喉を閉めて吹いていないか（低音を吹く時など喉の音が鳴っていないか）などです。喉に力が入った音は聴けばすぐに分かります。力が入っていても音は鳴りますが遠くまで届きません。そして力の入った音で音程を合わせることは至難の業です。リコーダーは息を吹き込めば、音は出る楽器です。しかし追求していくほど難しくなっていきます。音色の追求は私自身、現在も研究し続けている事です。様々な楽器の生演奏やCDを聴き作品に触れる事で目指す音が分かってきます。そう簡単な事ではありませんが、みなさんも今一度、美しい音色を出すにはどうすれば良いのか考えてみてください。

第44回全日本リコーダー教育研究会 全国研究大会「大阪大会」開催報告
〈研究主題〉リコーダーを用いての様々な授業の工夫

第44回全日本リコーダー教育研究会全国研究大会「大阪大会」実行委員長　金　秀賢

「リコーダーを用いての様々な授業の工夫」を研究主題に、令和元年10月25日、26日の両日にかけて、大阪府池田市で第44回全日本リコーダー教育研究会全国研究大会「大阪大会」を開催しました。全国のたくさんの方から参加いただきました。

一日目の第1会場の大阪教育大学附属池田小学校では提案演奏や二つの公開授業がありました。まず、アンサンブルtutuによる「様々な演奏形態」という主題で独奏から合奏までの楽器編成による提案演奏がありました。児童の皆さんは小さい楽器から大きい楽器まで初めて見た楽器を使った演奏を聴いて、演奏後には楽器を触ってみたり、吹いてみたりして興味をもってくれました。

その後、音楽室で一つ目の公開授業を行いました。宮丸奈草先生による4年西組の「目指せ 楽器名人」という題材での授業でした。

タンギング、息の量、姿勢、サミングの指づかいに気をつけ、グループの演奏でお互いに意見を交換しながら問題点を見つけ、音を合わせて、思いや意図に合った演奏が出来ることをめざした授業でした。また、同じ曲を歌で、リコーダーで、その歌の内容が分かる映像を見ながら色々なパターンでの授業も良かったです。

二つ目は山上睦美先生による3年生と6年生の共同授業を体育館で行いました。6年生が自分とのペアの3年生に上手に吹けるようにアドバイスをしていました。指の位置、休符の時の表現、息の吸う速さ、強弱の表現などをみんなで考えながら演奏をしました。最後には来てくれた先生方に健康、安全、幸せを祈る応援歌を披露してくれました。迫力がある素敵な応援歌でした。

公開授業が終わってからは校長の佐々木 靖先生に安全教育についてお話を聞きました。平成13年に起きた痛ましい事件から得た教訓で、二度と悔いを残さないように、後悔せず済むように学校安全にかかわる取り組みを続けている内容で、多くの先生方は涙を流しながら聞きました。

第2会場の池田市保健福祉総合センターに会場を移し、開会式の後には、グループ協議を行いました。その後、文部科学省初等中等教育局教育課程課の志民一成教科調査官から音や音楽によるコミュニケーションや公開授業についてや、小・中学校音楽科の目標、新たな価値を生み出す豊かな創造性の育成、主体的に学習に取り組む態度などについての講話をいただきました。

子供たちが最も長く接する先生方が前向きに働く姿、音楽

アンサンブルtutuの演奏

宮丸先生の公開授業

山上先生の公開授業

佐々木校長先生のお話

志民調査官の講話

を楽しんでいる姿を見せて「大人になるって素敵なことだよ!」と言うメッセージを伝える役割をすると言うお話では責任感も感じました。

その後、全国交流会ではアンサンブルtutuによる歓迎の演奏や各地のリコーダー教育研究会の方々や楽器メーカーさん方々のお話を聞きながら楽しい時間を過ごしました。

二日目は池田商工会議所で行いました。最初の講義は大阪リコーダー教育研究会会長の三木貞夫先生による「手に障がいのある児童、生徒への指導法」でした。大阪リコーダー教育研究会で長い年月をかけて一番力を入れているところです。現在手に障がいのある生徒さんの状況やどういう形で授業をするか、リコーダーと仲良くなるための工夫などについてお話をしました。

次の講演は京都市立芸術大学、大阪教育大学校などの講師として、リコーダー奏者として活躍している秋山滋先生の「現代のリコーダーを取り巻く環境について」でした。

プロのリコーダー奏者について、学校での教育の事情、楽器の正しい扱い方、効果的な演奏について先生の独特なユーモラスな口調のお話しで楽しく学ぶことが出来ました。後半には皆で、「ロック・アラウンド・ザ・クロック」を演奏しました。表現の方法などの説明を聞きながら楽しく合奏することが出来ました。

そして、最後に閉会式を行い二日間の大会が盛会のうちに幕を閉じました。

大阪リコーダー教育研究会は会員が少ないため大会を無事に開催出来るか不安もたくさんありましたが、皆様のご協力のお陰で無事に終わることが出来ました。参加いただいた皆様、後援いただいた文化庁、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、池田市、池田市教育委員会、堺市教育委員会、池田市音楽連盟、公開授業をしていただいた大阪教育大学附属池田小学校、特別協力いただいた先天性四肢障害児父母の会の皆様に深く感謝申し上げます。次回の大会の盛会を祈念して、大会の報告といたします。本当にありがとうございました。

交流会のメンバー

三木会長の講義

秋山滋講師による講演

実行委員

公開授業を終えて

大阪教育大学附属池田小学校
宮 丸 奈 草

小学校のリコーダー学習においては、4年生で初めてサミングを学習します。この度の授業では、サミングの奏法を用いて「もののけ姫」の演奏に取り組みました。この曲は教育出版会社の教科書に掲載されているもので、児童が音の重なりを味わい、互いのパートを聴き合いながら、表現を工夫することができる教材です。サミングを使った音を自由に出せるようになると、いろいろな曲を演奏する幅が広がります。児童が楽しみながら演奏することで、自然にサミングを身につけることができるように、扱う曲にも配慮することが必要だと感じています。

児童は、「もののけ姫」の楽曲の前段階に学習した「ハローサミング」という曲でサミングに初めて挑戦し、高いミの音を響かせることができるように、タンギングだけでなく、息の量を調節したり、左手の親指の使い方を工夫したりしてサミングの音色にも意識できるように練習をしてきました。授業では、最後に映像も入れて演奏しましたが、後の協議会では、「児童の音色が変わった」というご意見もあり、映像の効果についても面白い研究ができるのではないかと感じました。

また、この度の授業では、グループで二重奏を工夫して演奏する活動を行いました。一人ひとりがまず、曲に対す

る思いや意図をもち、グループで互いに伝え合い、どのように工夫して演奏するかを話し合いました。児童は「かけ合い」や「音の重なり」の部分を理解し、主旋律を生かすための強弱のつけ方を工夫したり、旋律からイメージされた雰囲気を表そうとからだ全体を使って表現したりしていました。児童が自分の音と友達の音を調和させ、心を合わせて演奏する音楽は自分たちにも聴く人にも感動を与えるものだと思います。

この度の研究大会の授業を構成するにあたり、小学校でのリコーダー学習の奥深さや面白さを改めて実感することができました。今後も児童一人ひとりが楽しんでリコーダーを演奏できる手立てや教材開発、指導方法の研究等を行っていこうと思っています。

大会の関係者の皆様方には、公開授業という貴重な機会をいただきましたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

次回予告

第45回 全日本リコーダー教育研究会全国大会「横浜大会」のご案内

- 主　　催　全日本リコーダー教育研究会
- 後援（予定）文部科学省、横浜市教育委員会、他

1.日　　時　令和3年1月15日(金)13時受付 13時30分開始
2.会　　場　横浜市立義務教育学校西金沢学園(小中一貫校)
3.内　　容　5校時は、小学6年生の「ソプラノやアルトリコーダーの授業」
　　6校時は、中学生の「アルトリコーダーの授業」
　　吉澤実先生と合同演奏、授業の研究協議等
　　＊終了後は、18時より横浜中華街にて大懇親会を予定

詳細は近日中にJRSホームページに掲載致します。

全日本リコーダー教育研究会役員名簿

役職名	氏名	担当	所属先(令和元年9月30日現在)
会長代行	親泊明美		沖縄県リコーダー教育研究会
副会長	後藤俊哉	研究統括	横浜市立さわの里小学校
	小山内仁	財務統括	八雲町立野田生中学校
	根津江美子	広報統括	新潟県十日町市立西小学校
本部役員	井戸正利	事務局長兼任	板橋区立北前野小学校
	冨山和幸	事業統括	川越市立高階北小学校
	大吉幸	事業	恵庭市立島松小学校
	長谷川紘子	事業	福生市立福生第二小学校
	上江洲学	事業	与那原町立与那原小学校
	漆畑友美	財務	川崎市立久地小学校
	嶋見靖之	研究	佐渡市立高千小学校
地区担当役員	三笠裕也	北海道担当	北斗市立大野中学校
	嶋見靖之	新潟担当	佐渡市立高千小学校
	菅圭	栃木担当	足利市立東山小学校
	小形隆	茨城担当	古河市立古河第二中学校
	長谷川紘子	東京担当	福生市立福生第二小学校
	宮川史枝	長野担当	長野市立信里小学校
	鈴木光	静岡(静岡地区)担当	静岡リコーダー教育研究会
	山下照乃	静岡(浜松地区)担当	静岡リコーダー教育研究会
	長岡むつみ	三重担当	鈴鹿市立旭が丘小学校
	金秀賢	大阪・韓国担当	大阪リコーダー教育研究会
	松本聖子	宮崎担当	宮崎市立檍中学校
	福元さとみ	鹿児島担当	志布志市立伊崎田中学校
	高江洲博子	沖縄担当	沖縄県リコーダー教育研究会
事務局長	井戸正利		板橋区立北前野小学校
事務局次長	牛田恵美	庶務・コンテスト事務局担当	東京リコーダー教育研究会
	冨山和幸	事業・研究担当	川越市立高階北小学校
	漆畑友美	財務・会計担当	川崎市立久地小学校
監事	馬場喜久雄		竹早学園竹早教員保育士養成所

役職名	氏名	所属先(令和元年9月30日現在)
名誉会長	初代 花村大	故人
	二代 徳山博良	故人
	三代 中澤正人	板橋区文化・国際交流財団
顧問	小原惇	元新潟県公立中学校
	三木貞夫	元大阪市公立中学校
	影山建樹	元静岡県公立中学校
	橋本勤也	元高知県公立小学校
	越智健一朗	元東京都公立小学校
	皆川昌雄	元新潟県公立小学校
	森嘉雄	元新潟県公立小学校
	日置美知代	元三重県公立小学校
	原田彰	元鳥取県公立中学校(故人)
	仲本朝昭	元沖縄県公立中学校(故人)
	小池純夫	元新潟県公立小学校(故人)
名誉会員	榊正治	(鹿児島)
	玉利敬三郎	(東京)
	門野フミ	(鹿児島)
	太田正明	(長野)
	花岡澄	(長野)
	砂川徹夫	(沖縄)
	八幡健一	(鳥取)
	橋本研	(東京)
	近藤誠二	(北海道)
	中村毅	(新潟)
	中島聰	(故人)
	南雲照	(故人)
	諸岡忠教	(故人)
相談役	吉澤実	
	上杉紅童	
	本村睦幸	
	大竹尚之	
	金子健治	
	吉澤徹	
	北村俊彦	
	北山隆	

（平成29年10月1日～令和2年9月30日 ※令和元年9月30日に一部修正）

編　集　後　記

ここにリコ研だより第7号を発行する。今回も恒例となったコンテスト審査員より御寄稿いただいたことを心から感謝申し上げる。

また、長年にわたってコンテストの審査員長としてご尽力いただいた吉澤実先生におかれては、このたび70歳の古希を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げる。氏より、古希を境に審査委員長の任を勇退する旨をお聞きし、「令和」という新しい時代が到来するとともに、次世代にバトンは渡された。氏は昭和から平成にかけて長らく審査を担当し、その間、あらゆるものが変化していき、審査に関わるいくつかの問題に直面したが、それらの問題に対して高い専門性や教育者としての視点から対応していただいた。氏曰く「やってきたことに一点の曇りもなく」という言葉通り、その職責を果たしていただいたことに感謝の言葉しかない。今後とも変わらぬご健勝をお祈り申し上げる。

さて、新しい学習指導要領では、これから求められる資質能力は大きく転換してきていると言われている。これまでの教育では、知識集約型、いわゆる多くの知識をいかに蓄えるかというところに重きが置かれていたが、今後は、その知識をいかに活用するかという資質・能力に重点が転換し、さらに今後は価値創成型の資質・能力こそが求められると言われている。

1947(昭和22)年に学習指導要領(試案)が発布されて以来、音楽科では〈器楽〉が一領域として位置づけられてきた。そして、初代会長であった花村大氏(当時文部省教科調査官)によってリコーダーが教育楽器として導入され、2代会長の徳山博良氏によって器楽の教科書が作成された。

その花村初代会長が、本研究会の第20回全国研究大会で次のような巻頭言を書いている。

「一つの文化が芽生え、花を咲かせて、やがて結実してその成果を顕示するのには、どのくらいの歳月がかかるのでしょうか。成熟した一つの文化を認識し評価し、その後を辿ったとき、それは決して短い期間でなかったことは、歴史が語ってくれます。

それほどまでに大袈裟に構える心積もりは毛頭ありませんが、私たちが取り組んできたリコーダーの教育的研究の跡も、すでに20年を経過しました。それが一つの文化を形成するにはほど遠く、また遅々とした歩みであるかもしれませんが、全国的に展開された音楽教育の文化活動であることは確かです。

1972年(昭和47年)に全国大会という名目と規模で、岐阜県の恵那市で全日本リコーダー教育研究会が発足しました。爾後回を重ねるごとにその普及と内容の充実深化が進展してきました。それは、それぞれの地域の教育の場で、日々積み上げられる実践の軌跡が、拓かれる豊穣な地の上に定着・固定化されてきていることの証であると考えられるのです。そして見るべき現象としてリコーダーが、学校の枠を越えて一般社会の中で活躍し始めていることです。これこそ私たちが希い望んできたことです。また、注目すべきことは、地方の世紀が展開されてきていることです。北海道から沖縄県までの広い地域で開催された研究大会で接した研究発表や演奏などを通じて受けた衝動・感動の大きさに、そのことを感じられます。この動向は、都市一点集中の形態ではなく、中央・地方の区別なくそのエネルギーは拡散され普遍化されて全国に及んできていることです。

それはまさに文化としてのリコーダー音楽教育の胎動の兆しでもあるのです。この大いなる流れの源泉を創り出しているのは、わが国のリコーダー研究家・演奏家の方々の情熱を傾けての啓蒙活動と直接に教育を預かる学校の先生方との強い提携による結果であろうと考えます。その媒介役の一端を本研究会も担っているのです。

この活動の根幹は、なんといっても強靭な毛根の培養にあります。それは児童・生徒のリコーダー音楽に対する関心の高揚です。リコーダーによって音楽の中に遊び楽しみ、そして進んで音楽に意欲を燃やす子どもを育成することが、まず考えられなければなりません。10年を経たこの機会に本研究会の原点に戻って豊かな文化創造への志向の姿勢を整えたいと思います。」

平成から令和へバトンが渡された記念すべき年に第44回大阪大会を開催し、令和2年度の第45回大会は横浜市で開催予定である。昭和47年に創立された本会は、昭和から平成へ、平成から令和と、多くの先輩から後輩へバトンが引き継がれてきた。このバトンは時代を超えて本会に関わる全ての人とつながるもの、本会としての一体感を作るものだと思う。改めて本研究会の原点に戻って、リコーダー教育によって、豊かな文化創造への志向の姿勢を今一度整えていきたい。全国各地より多くの賛同をご期待申し上げる。

入会のお知らせ

本会への入会手続きは随時受け付けております。一緒にリコーダーの花を咲かせましょう!

共に学び、共に成長するリコーダー愛好家の皆さんの入会を心よりお待ちしております。

本会の会員は次のとおりとする。

(1)正　会　員　リコーダーを愛好する個人で別に定める会費を納める者

(2)研究会会員　各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会で別に定める会費を納める団体

(3)会　　員　本研究会が開催する全国研究大会及びコンテストで参加資格及び出場資格を得た個人及び団体で各事業の申し込みにおいて別に定める会費を納める者

(4)維 持 会 員　本研究会の目的に賛同し、別に定める会費を納める者及び団体

(5)名誉会員　本会に対し特に功労のあった者のうちから、総会の議決をもって推薦された者。

(名誉会長、顧問、参与、名誉会員及び相談役の名称で名簿に記載する。)

会費は、年会費として徴収する。

(1)正会員一人＝ 3,000円
　(ただし研究会会員で登録した者は免除)

(2)会員一団体＝ 3,000円

(3)研究会会員一研究会＝10,000円

※研究会会員とは、各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し、本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会を指す。

※研究会会員に所属し、会員名簿に掲載されている者は正会員と同様の扱いとする。

(4)会費の納入は、毎年2月末日までに納入すること。
　(納入方法は別途定める。)

申し込み先
〒174-0063 東京都板橋区前野町5-44-3
東京都板橋区北前野小学校内
全日本リコーダー教育研究会　井戸正利
直通電話:090-8876-7803(学校への電話はご遠慮ください)
■http://www.zenrikoken.com/ ■Email zen.rikoken@gmail.com